

ポパーの科学論とマルクスの歴史理論

——ソ連崩壊によって反証されたものは何か——

山口 拓 美

はじめに

今世紀を代表する科学哲学者カール・R・ポパーが、科学と疑似科学の境界設定問題と取り組み始めたのは、主としてマルクス主義の歴史理論に対する疑念に促されてのことであった⁽¹⁾。この疑念は、後に多くの実りをもたらすことになった。ポパーは、まず、1934年に出版された『探究の論理』⁽²⁾で境界設定問題を解決した。次に、彼はこの科学論に基づいてマルクス理論を批判的に検討し、その成果を『歴史主義の貧困』(1944/45年)⁽³⁾および『開かれた社会とその敵』(1945年)⁽⁴⁾に結実させた。そして、この両書は、マルクス主義批判を代表するものとして高い評価を得ることになった。

このようなマルクス主義批判者としてのポパーの成功は、1991年のソ連崩壊によって、更に決定的なものとなったように見える。例えば、『開かれた社会とその敵』の訳者の一人である小河原誠氏は、「ソ連邦崩壊後における開かれた社会」の中で、ポパー思想の今日的意義を解説しつつ次のように述べている。

「歴史的に実践されたものとしてのヒストリシズムの典型的例のひとつは、周知のように、マルクス主義であった。ところが、ソ連邦の崩壊は、この形態のヒストリシズムが社会主義者にとってさえ否認しようのないかたちで反証されたことを告げた。かつてスターリンは、1936年に、ソヴェト社会が『資本主義から社会主義への過渡期』を終了したと宣言したが、今や、歴史は、皮肉なことに、われわれの目の前で『社会主義から資本主義への過渡期』——揺れ戻しも当然生じてくる

であろう過程——を歩みだしている。ここにあるのは、誰が見ても、歴史の側からの皮肉である⁽⁵⁾」

このような見解は、今日広く世間一般に行き渡っている考え方と共通する主張でもあろう。しかし、ここで注意すべきなのは、ソ連崩壊を前にして、ポパー自身も本当にこれと同様の見解を持つに至っただろうか、という点である⁽⁶⁾。というのも、『開かれた社会とその敵』で、ポパーはこれと正反対のことを述べていたからである。小河原氏の見解は、「マルクス主義はソ連の崩壊によって反証された」というものである。これに対してポパーの見解は、「マルクス主義はソ連の成功によって反証された」というものだったのである。小河原氏の見解とポパーの見解とでは、一体どちらが正しいのであろうか。

この疑問を突き詰めて行くと、われわれは、史的唯物論とロシア革命の関係をめぐるあの古典的な論争に帰り着くことになる。史的唯物論とロシア革命の関係をどのように理解するかということは、マルクス主義において、極めて重要な問題であり続けてきた。ところで、この問題に対するポパーの見解は、それが優れた方法論に基づいていることから、数ある議論の中でも最も重要な見解であるといえる。以下において見るように、ポパーはただ単にヒストリシズムのレッテルを貼ることによって史的唯物論を断罪したのではなく、ロシアにおける一連の出来事を観察することによってこれを反証された理論として結論づけたのである。だが、このようなポパーの議論は、ソ連崩壊という事実を前にすると、むしろ再検討を迫られることになるように思われる。本稿ではこの再検討が行われる。

よく言われるように、ロシアでの十月革命とそ

れに続く社会主義建設は、自然成長的に生じたものではなく、一定の理論に依拠しつつ目的意識的に行われた壮大な実験であった。この70年以上に及ぶ実験が終了したことによって、マルクス主義における幾つかの理論の真偽を判定するための経験的事実が、現在われわれの前に与えられている。本稿は、それらの理論の中からマルクスの史的唯物論を取り上げ、その真偽を、ポパーの科学方法論を用いて検証しようとするものである。マルクス経済学の基礎理論である史的唯物論が、ソ連崩壊後の今日も、科学的理論として生き残っていると言えるのか否かを明らかにすること、これが本稿の目的である⁽⁷⁾。

I

ポパーは、まず何よりも、科学方法論における反証主義の提唱者として著名である。彼は、この反証主義の立場から、マルクスの諸理論、とりわけ彼の史的唯物論を検討した。そこで、本節では、まずポパーの反証主義の基本的な内容を整理し、ついでポパーによる史的唯物論の評価をできるだけ正確に再現する。

ポパーの反証主義とは、おおよそ以下のようなものである⁽⁸⁾。

①ある理論が科学的であるか否かを判定する基準は、その理論の実証可能性ではなくて反証可能性である。テストされるべき理論と初期条件から、なんらかの予測命題を演繹し、これを実験的観察またはその他の観察の結果と対決させる。結果と一致していればその理論は裏付けられたとみなされ、明らかに一致していなければ反証されたとみなされる。その際、理論を裏付ける諸事例を見いだしたということにはあまり意味がなく、最善の努力にもかかわらず反証できなかったという事実が重要である。このときにのみ、その理論はテストにたえて生き残った、ということが出来る。

②理論の反証可能性には度合いがある。反証の機会がより多く、したがってより大きなリスクを伴っている理論ほど、よりよい理論であり、より

科学的な理論である。科学理論は、ある種の出来事が起こることを禁ずるものであるが（例えば、エネルギー保存則：「永久運動機をつくることはできない」、エントロピーの法則：「百パーセントの効率をもつ機械はつukれない」）、禁ずることが多ければ多いほど反証の機会が多くなり、その理論はよりよい理論である、ということになる。どんな出来事の生起も禁じず、いかなる出来事によっても反証できないような理論は、科学的理論とはいえない。

③ある理論の信奉者は、その理論がテストによって反証された場合でも、その理論を再解釈したり、何らかの補助的な仮説を導入したりして、反証を免れるようにすることができる。しかし、このような反証回避作業は、その理論の科学性の低下や破壊をもたらすだけである。

④科学は、諸理論間のダーウィンの生存競争を通じて進歩する。たとえある理論が反証されなかったとしても、その理論の容認は暫定的なものにとどまる。なぜなら、その理論はより新しい理論にとって代わられる可能性が常に存在しているからである。劣った理論を打ち倒し、よりよい理論にとって代えることが、科学的進歩の意味である。

以上のような、ポパーの反証主義は、科学的理論についての学説として妥当なものであると思われる。この反証主義の立場から、ポパーはマルクスの諸理論を検討した。史的唯物論に対する彼の見解は、以下のようなものである。

ポパーによれば、マルクスの史的唯物論は、占星術による予言とは異なって、反証可能な理論であり、反証可能な予測を提出している。占星術者は、「物事をあいまいに予言して、予言がはずれることのないようにし、反駁不能になるようにしておく⁽⁹⁾」のが常であり、こうすることによって自分たちの理論の反証可能性をも破壊している。これに対して、以下で見るように、史的唯物論によるマルクスの予測は反証可能なものである。また、「ごく一般的な予言をすること、例えば、適当な時間内に雨が降るであろうと予言することは簡単である⁽¹⁰⁾」。だから、「数十年もすればどこかで

革命が起るであろうという予言はとるに足らないもの⁽¹¹⁾である。だが、マルクスの予測はこのような性格のものではない。「マルクスはそれよりも僅かばかり多くのこと、そしてまさしく出来事によって十分反証されうることを述べた⁽¹²⁾」のである。

そこで、問題となるのは、マルクスの予測が正しかったのか否かである。ポパーは史的唯物論によって予測された来るべき社会革命のメカニズムと、この予測に対する格好のテストとなった歴史的出来事について次のように述べている。

「マルクスは、すべての社会革命は次のような仕方展開すると主張した。物質的生産諸条件は、社会的諸関係や法的諸関係と矛盾し始めるまで生長し成熟し、小さくなってしまった外套からはみ出すようについには破裂する。『その時に、社会革命の時期が始まる』とマルクスは書いている。『経済的基礎における変化と共に、巨大な上部構造の一切が或いは速やかに或いは比較的ゆっくりと変形される……』[上部構造内での]『新規のより高度な生産諸関係は、その生存のための物質的諸条件が旧社会そのものの母胎の中で成熟しきるまでは決して出現しない』。この言明の見地からすると、私の信じるところ、ロシア革命をマルクスによって予言された社会革命と同一視することは不可能である⁽¹³⁾」

「マルクス主義によればプロレタリア革命は工業化の最終成果であった筈で、その逆である筈はなく、高度に工業化された諸国で初めて成功すべきものであり、ロシアでは更に大きく遅れる筈であった⁽¹⁴⁾」

「ロシアは、経済的諸条件が立ち遅れていたにもかかわらず、すでに革命をなし遂げていた。先進諸国では、民主主義の産みだしたあてどのない希望が革命を阻んでいたのである⁽¹⁵⁾」

「皮肉なことに、マルクス主義の歴史そのものが、この誇張された経済学主義を明白に反証する例を提出している⁽¹⁶⁾」

ポパーは、『開かれた社会とその敵』において、マルクス理論全般にわたってかなり詳細な批判を展開しているが、中でも上記の部分が彼にとって

は決定的なものであったらしく、その後に発表されたいくつかの著書では、この点のみを繰り返し指摘している。例えば、1979年から1982年までの間に行われた対談の中で、彼は次のように述べている。

「たしかに、ロシア革命によってマルクス主義はどんな形で反駁されたのか。それが説明されねばならないでしょう。マルクス主義は、あらゆる社会的変革の因果過程は生産手段の変革から始まると主張していました。生産手段の変革にとまって、人間のあいだの関係もまた変わり、ついには社会における支配体制も変革されるということです。そして、最終的には、社会における諸観念、人間の諸思想、イデオロギーも変わるということです。ロシア革命が示したのは、正確に言って、それとは逆の過程が出現しようということでした。つまり、ある一定の観念、たとえば、社会主義はプロレタリアートの独裁プラス電氣化からなる——これはレーニンの指導的な思想でしたが——といった観念が、上から社会を変革し、そしてそれから、もちろん、生産手段も変革しようということなのです。ロシアにおいては、電氣化は、下から出現したのではなく、上から、しかもある種のイデオロギー的見解の支配によって、したがって観念によって、実現されたのです。これは明らかにマルクス主義理論を反駁するものです。しかしながら、それは、マルクス主義者たちによって、そのようなものとして受けとめられなかった。——反対に、彼らは、ロシア革命は、マルクス主義革命であり、マルクス主義によって予見されていたと主張していました⁽¹⁷⁾」

ポパーによる、史的唯物論とロシア革命の関係に関する見解は、以上のようなものである。彼の見解は、反証主義の手法を別とすれば、特に目新しいものとはいえない。同様の主張は、もっと早い時期に、マルクス主義者自身によってなされている。アントニオ・グラムシは、ロシア革命直後に、次のような有名な文章を書いている。

「ボリシェヴィキの革命は事実よりもイデオロギーにささえられている（だから、根本的には、われわれがそれについて知っている以上に知る必要は

ほとんどない)。それはカール・マルクスの『資本論』に反対する革命である。マルクスの『資本論』は、ロシアでは、プロレタリアートよりもブルジョアジーの書物だった。それは、ロシアにブルジョアジーが形成され、資本主義時代がはじまり、西方型の文明がうちたてられるまでは、プロレタリアートの反抗や、階級的な要求や革命については考えることさえできない、という宿命的必然性の批判的証明だった。だが事実がイデオロギーをのりこえた。史的唯物論の教条にしたがえばロシア史はこの批判的図式の枠内で発展しなければならなかったであろうが、事実がその図式を粉砕してしまったのだ。ボリシェヴィキはカール・マルクスを否定する。そして、史的唯物論の公式が、おそらく考えられるほどには、また実際考えられてきたほどには厳格なものではないことを、実際行動と現実の成果とを証拠に、主張しているのだ¹⁸⁾

しかし、ポパーの主張は、このグラムシのそれよりも、より立ち入ったロシア革命史の観察に基づいている。グラムシがこの文章を書いたのは、1917年のことであり、したがってこれは、ボリシェビキによる政権奪取という事実のみに基づいている。これに対してポパーの見解は、ボリシェビキ政権が「生産手段」、すなわち社会主義の物質的条件を作り出すことにも成功した、という観察「事実」を証拠としている。ポパーのこの観察は、第一次五カ年計画以後のソ連経済の進展を対象としたものであり、そのことは、ポパーの次のような行文から結論できる。

ロシアは「社会工学の領域で大胆なそしてしばしば成功した実験を行っている……失敗した実験の時期、すなわち、いわゆる『戦時共産主義の時期』の後で、レーニンは、制約された一時的なものだが事実上私企業への復帰を意味する処置の採用を決心した。このいわゆるネップ（新経済政策）とその後の諸実験——五ヶ年計画など——は、かつてマルクスとエンゲルスが提起した『科学的社会主義』の諸理論とは、何の関係もない¹⁹⁾

このように、ポパーがマルクス主義に対する反証と考えたものは、ソ連における「成功した実験」であり、より具体的には「五ヶ年計画など」のこ

とである。ポパーにとって重要なのは、単にボリシェビキが政権を取ったという事実だけではない。それに加えて、ボリシェビキが社会主義の物質的土台を観念の力で上から作り出すことにも成功したという「事実」が重要なのである。これによって、史的唯物論の経済主義が初めて反駁されるからである。

以上から、ポパーの主張を次のような推論に要約することができる。

大前提：マルクスの史的唯物論はロシアでの社会主義建設を禁じていた。

小前提：しかるにロシアは社会主義建設を成功させた。

結論：よってマルクスの史的唯物論は反証された。

以下に続く二つの節では、上記の大前提と小前提の真偽を検証する。その際、本稿では、先に見たポパーの反証主義を正しいものと前提し、これを用いて論を進める。なお、本稿がマルクスの史的唯物論、または単にマルクス理論と呼ぶものは、ポパーが念頭においているものと同様に、『経済学批判』と『資本論』の序文に定式化されている周知の理論のことであり、とりわけ社会構成体の移行のメカニズムの理論を対象とするものである²⁰⁾。また、本稿が社会主義と呼ぶものも、『経済学批判』の序文で言及されている新社会構成体、すなわち資本主義にとって代わる新しいより高度な生産諸関係を有する社会構成体のことである。

II

「マルクスの史的唯物論はロシアでの社会主義建設を禁じていた」。この言明は、少なくとも1917年以前までは、ほとんどのマルクス主義者によって真なるものと考えられていた。また、それ以降においても、マルクス理論の立場を堅持する論者からは、同様の主張が繰り返された。例えば、カール・カウツキーは1918年に出版された『プロレタリアート独裁』の中で、次のように述べている。

「『一国は他国から学ぶことができるし、また学

ばなければならない。たとえある社会が、その社会の運動の自然法則への手がかりをつかんだとしても、その社会は、自然に則した発展諸段階を跳び越えることも法令で取り除くこともできない。しかし、その社会は、産みの苦しみを短縮し和らげることはできる』ポリシェビキの友人たちは、あれほど頻繁にマルクスを引き合いに出すにもかかわらず、この一節のことは全く忘れてしまっているようである。彼らが説教し実行しているプロレタリアート独裁なるものは、自然に則した発展諸段階を跳び越えたり法令で取り除いたりしようとする壮大な実験以外の何ものでもない。彼らは、これが社会主義を産み出すための、『産みの苦しみを短縮し和らげるための』、最も苦痛の少ない方法であると思っている。しかし、引き続き譬えを用いるなら、彼らの行っていることは、むしろ次のような妊婦の姿を思い起こさせるものである。すなわち、もどかしい妊娠期間を短縮し、早期の出産を引き起こすために、最高に狂気じみた跳躍運動を行っている妊婦である。そのような行為の産物は、きまって、生育不可能な子供なのである²¹⁾」

さらに、五ヶ年計画の成果も、カウツキーによれば、奴隷労働によって建設されたピラミッドのようなものであり、そして、「われわれがロシアで見えるものは、社会主義ではなくて、社会主義に対するアンチテーゼである²²⁾」というのがソ連に対する彼の評価であった。

しかし、ロシアでの社会主義建設の進行に伴って、「マルクスの史的唯物論はロシアでの社会主義建設を禁じていた」という言明を偽であると考えたマルクス主義者が増えていった。例えば、モーリス・コーンフォースは、『開かれた哲学と開かれた社会——カール・ポパーのマルクス主義反駁に対する返答』の中で次のように述べている。

「マルクス主義は反証可能であり続けるのである。マルクス主義者は、ロシアに始まった社会主義革命を、容易に説明することができる。だが、もし社会主義革命が、例えば極東や中央アフリカで始まったとすれば、あるいはまたどこでも起ら

なかったとすれば、このことは説明されえなかったであろうし、実際マルクス主義を反証したことであろう。しかし社会主義革命は現実には始まったのであり、しかもマルクス主義が許容している場所で始まったのである²³⁾」

この見解は、先に引用したカウツキーの反応とは反対のものである。カウツキーがロシアにおける社会主義建設の禁止を主張し続けるのに対して、コーンフォースはその許容を主張する。これら両見解は、マルクス理論の理解という点で、いずれが正しいのであろうか。

私は、コーンフォースの見解は、反証を免れるための理論の再解釈に基づいており、したがって史的唯物論の反証可能性を低減させる謬見であると考えられる。こうした判断は、ロシア革命を遂行した当のポリシェビキたちにも支持されるものと思われる。なぜなら、彼らは、マルクスの理論と自分たちの理論との相違点を明確に意識していたからである。すなわち、ロシア革命はマルクス理論に対抗する新しい理論に基づいて実行に移された革命であって、このことはポリシェビキの理論家が明快に文章化していたことだからである。ここで、社会革命についてのマルクス理論とポリシェビキ理論の相違点を明確化しておくことは、「マルクスの史的唯物論はロシアでの社会主義建設を禁じていた」という命題の正しさを確認するためにも、また、史的唯物論の本質の解明のためにも極めて重要である。そこで、以下において、ソ連の社会主義建設を導いてきたポリシェビキ理論とマルクス理論との相違点をできるだけ簡単に整理しておきたい。

われわれは、ポリシェビキによるロシア革命の理論的基礎付けの最も明快な定式化を、スターリンの『レーニン主義の基礎について』の中に見いだすことができる。そこでは、レーニン主義の新しさが、次のように記されている。

「レーニン主義にかんする完全な真理は、レーニン主義がたんにマルクス主義を復活させただけでなく、さらに一步前進して、資本主義とプロレタリアートの階級闘争の新しい諸条件のもとで、マルクス主義をいっそう発展させた、という点に

ある²⁴⁾」

この「新しい諸条件」のもとでの「一步前進」は、「マルクス主義をいっそう発展させた」といった類のものではなく、理論的には、決定的な跳躍であったといわなければならない。なぜなら、レーニン主義は、この「新しい諸条件」のもとでは、次のような大変化が起こっていると主張するからである。

「以前は、どれか一国の経済状態の見地から、プロレタリア革命の前提条件の分析がおこなわれるのが普通であった。だが現在では、この態度はすでに不十分である。現在では、すべての国、あるいは大多数の国の経済状態の見地から、すなわち世界経済の状態の見地から、問題を取りあつかわなければならない。なぜなら、個々の国と個々の国民経済とは、自足的な一単位であることをやめて、世界経済とよばれる一つの鎖の環に転化したからであり、古い『文化的』資本主義は発展して帝国主義になり、しかも帝国主義は、ひとにぎりの『先進』諸国が、地球人口の圧倒的な大多数を金融的に奴隷化し、植民地的に抑圧する、全世界的体系だからである。以前は、ある国、もっと正確に言えば、ある発展した国に、プロレタリア革命の客観的条件が存在するか、存在しないかをうんぬんするのが、つねであった。だが現在では、この見地はすでに不十分である。現在では、一個の全体としての世界帝国主義経済の全体系に、革命の客観的条件が存在することについてかたならなければならない。そうして、そのさい、この体系の構成要素として、工業的にはまだじゅうぶん発展していない若干の国々が存在することは、もしその体系全体がすでに革命がおこるほど成熟しているならば——いっそう正確に言えば、体系全体が、すでに革命がおこるまでに成熟しているのであるから——革命にとってうちかちえない障害とはなりえないのである²⁵⁾」

この行文が主張している重要な論点は、マルクスの史的唯物論が「新しい諸条件」によって反駁された、ということである。マルクスの史的唯物論は、社会構成体の移行のメカニズムを定式化しているが、彼がこの移行論を適用する基本単位は

一国であり、このため『資本論』も一国の資本主義経済を対象として叙述されている。マルクスの資本主義経済に対するかかる基本認識が最も簡潔に表現されているのは、『資本論』の序文に記された次の一文である。

「産業のより発展した国は、それほど発展していない国に、ただそれ自身の未来の姿を示しているだけである²⁶⁾」

しかし、この命題こそレーニン主義とは最も相容れない思想なのであり、レーニン主義者はこの命題が「新しい諸条件」によって反駁されたとみなしたのである。このことは、トロツキーの次の行文の中により明確に見て取ることができる。「『工業的にいっそう発展した国は、それほど発展していない国に、ただそれ自身の未来のイメージだけをしめす』。方法論的にいって、全体としての世界経済から出発しないで、型としての一資本主義国から出発しているマルクスのこの言葉は、資本主義的進化が既往の運命や工業的水準のいかんにかかわらず、いっさいの国々を包摂したのに比例して、ますます当てはまらなくなっている。かつてのイギリスはフランスの未来を、そしてそれよりはるかにすくなくではあるが、ドイツの未来をしめしたが、しかしロシアやインドの未来はすこしもしめしはしなかった²⁷⁾」

このように、マルクス理論の根底にある根本認識が、「新しい諸条件」によって反駁されたというところから、レーニン主義は出発している。この点で、ポリシェビキ革命を「『資本論』に反対する革命」とするグラムシの見解は全く正当なものであると言える。『資本論』では、自律的な有機的全体としての資本主義社会が叙述されており、その「発生、生存、発展、死滅を規制²⁸⁾」する法則の解明が追究されているのであるが、その際マルクスが有機体に見立てているのは「一社会」ないし「一国」である。これに対してレーニン主義によれば、一国民経済はもはや自律的な一つの単位ではなく、世界経済の従属的な一構成要素に成り下がる。それは、マルクスの時代の古い資本主義が、その発展の結果として帝国主義へと進化したからである、とされる。帝国主義的世界経済が、今や

一つの有機的全体になってしまったのである。これが、レーニン主義の資本主義に対する根本認識である。資本主義のこのような進化の結果として、スターリンによれば、社会革命のメカニズムも次のような変化を遂げる。

「以前は、その国の内部的発展の結果としてしか、プロレタリア革命をみていなかった。だが現在では、この見地はすでに不十分である。今日では、まず第一に、帝国主義の世界的体系の矛盾が発展した結果として、世界帝国主義戦線の鎖が、ある国で断ちきられた結果として、プロレタリア革命をみなければならない。革命はどこではじまるか、どこで最初に資本の戦線は突破されるか、どの国でか。工業がいっそう発展して、プロレタリアートが多数をしめ、文化程度がいっそう高く、民主主義のいっそう発達したところだと、以前にはこたえるのが普通であった。だがレーニンの革命理論は、つぎのようにこれを反駁する——いやそうではない、かならずしも工業がよりよく発展している等々のところだというわけではない。資本の戦線は帝国主義の鎖が他よりも弱いところで断ちきられるものである。……1917年には、帝国主義的世界戦線の鎖は、他の国々にくらべてロシアでは弱かった。そのロシアで鎖もまた断ちきられて、プロレタリア革命に出口をあてた。……近い将来に鎖がきれるのは、どこであろうか。こんどもまた他にくらべて鎖の弱いところである。たとえば、インドで鎖が断ちきられることも、ないとはいえない⁹⁹⁾」

社会構成体の移行のメカニズムは、今やマルクスのそれとは著しく異なったものとなっている。マルクス理論においては、工業が未発達でプロレタリアートが少数派に止まる国でのプロレタリア革命は禁止される。これに対して、レーニン主義においては、プロレタリア革命がロシアやインドのような工業発展の遅れた農民国から始まること許容される。そして、レーニン主義は、ロシアの十月革命をかかえる理論の実現とみなすものである。

だが、上記の引用部分は政治権力の奪取の段階までを述べているにすぎない。それに続く段階と

して、次に、社会主義的生産様式の建設が問題となってくる。この社会主義建設についての理論の点で、レーニン主義は二つに分かれることになった。すなわち、「永続革命論」と「一国社会主義論」がそれである。

1924年の『レーニン主義の基礎について』の初版には、以下のような一節が含まれていた。

「しかしブルジョアジーの権力をたおして、一国内にプロレタリアートの権力をうちたてただけでは、まだ社会主義の完全な勝利を確保したことにはならない。社会主義的生産を組織するという、社会主義の主要な任務が、まだ将来にのこされている。いくつかの先進諸国のプロレタリアートの共同の努力がなくても、この任務を解決することができるだろうか、一国で社会主義が最後の勝利をかちえることができるだろうか。いや、できない。ブルジョアジーをうちたおすためならば、一国の努力だけで十分である。このことは、わが革命の歴史がものがたっている。だが社会主義が最後的に勝利するためには、すなわち社会主義的生産を組織するためには、一国の、ことにロシアのような農民国の努力だけでは、不十分である。このためには、いくつかの先進国のプロレタリアートの努力が必要である¹⁰⁰⁾」

これは、明らかに永続革命論に連なる見解である。だが、スターリンは1926年の『レーニン主義の諸問題によせて』において、上記の自らの定式を「正しくないものになった」と述べ、その上で「勝利した国のプロレタリアートは、権力をにぎったのち、自国において社会主義的生産を組織することができるし、また組織しなければならない¹⁰¹⁾」という一国社会主義論を強調した。

永続革命論は、ロシア革命を世界革命の一環としてとらえ、世界革命の実現をもってロシア革命もはじめて完結すると主張する。したがって、ロシアでの社会主義建設を成功させるには、世界各国への革命の波及が必要条件となるのであり、ロシア一国だけの社会主義建設は不可能であると結論する。すでにみたように、レーニン主義の出発点は、資本主義を国民経済ではなく世界経済の単位で把握することにあつた。すなわち、世界経

済が一つの有機的全体になっていること、それゆえ革命のための客観的条件も全体としての世界経済の中に求められなければならないこと、これがレーニン主義の根本認識であった。この立場からは、革命の実現についても世界経済の単位で主張されるのが論理の自然的成り行きである。社会主義建設のための物質的条件は世界の単位で存在しており、社会主義建設も世界の単位で行われるのである。この点で、永続革命論はそれなりに一貫した理論になっている。

だが、問題は、この理論が正しかったのか否かである。十月革命の後、ポリシェビキは他国でのプロレタリア革命の勃発を期待した。しかし、7年たっても期待された世界革命は起こらなかった。プロレタリア革命が他国へと、とりわけ先進国へと波及するという予測は外れた。かくして、永続革命論は、ソ連においては排除されることになった。代わって一国社会主義論が登場した。「一国における社会主義の勝利は——たとえば、その国が資本主義的にあまり発展していない国であり、他の諸国には資本主義が維持されていて、しかも、これらの国が資本主義的にもっとよく発展している国であるばあいさえも——まったく可能であり、また予想される⁹⁹」。ソ連の社会主義建設を現実に根拠づけた理論はこれである。この理論によって、農民が人口の約8割を占める農業国においても、一国だけで、資本主義よりも高度な社会主義的生産様式への移行が可能であるとされることになった。ロシアにおいて社会主義の実験を導いたレーニン主義理論の要点をあらためて整理しておこう。

①帝国主義の時代には、世界経済が一個の有機的全体となり、各々の国民経済はその構成要素となる。②したがって、プロレタリア革命のための客観的条件も全体としての世界経済の階層に求めなければならないのであり、国民経済の階層に求めてはならない。③もし、全体としての世界経済の階層にプロレタリア革命のための客観的条件が存在するなら、その構成要素の中に資本主義的に未発達な国々が含まれていても、革命の障害とはならない。④プロレタリア革命は、世界経済の構

成要素のうち他よりも弱いところから始まる。その際、その国が資本主義的に未発達な国であることもありうる。⑤政権奪取に成功したプロレタリアートは、たとえその国が資本主義的に未発達であったとしても、一国だけで社会主義的生産を組織することができる。

このように、ロシアにおける十月革命とその後の社会主義建設は、マルクスの史的唯物論とは両立しえない理論によって根拠づけられた出来事である。したがって、コーンフォースが行ったようなロシア革命とマルクス理論を調和させようとする試みは、マルクス理論の反証可能性を破壊するだけでなく、レーニン主義理論のオリジナルティをも無視してしまうものである。レーニン主義理論は突然変異的な新理論であって、マルクス理論の単なる延長ではないのである。マルクスの史的唯物論とレーニン主義の革命理論は、相互に排除しあう関係にある。一方が真であれば、他方は偽である。

よって、以上のような理論的対立からも、「マルクスの史的唯物論はロシアでの社会主義建設を禁じていた」という言明は、正しい命題であると結論しうる。

III

「しかるにロシアは社会主義建設を成功させた」。本節では、この言明の真偽を検証することが課題となる。

マルクスの史的唯物論によれば、ある時点で資本主義の発達した国Aとその遅れた国Bが与えられた場合、Bの目指すべきものはA的な生産の様式であり、決して社会主義的生産の組織化ではない。したがって、もしBがAよりも先に社会主義的生産様式への移行に成功したとすれば、マルクスの史的唯物論は反証されることになる。1917年の時点で、英米独仏に先んじて露が社会主義建設に乗りだし、それに成功したとすれば、あるいはその他の非先進諸国で同様のことが起こったとすれば、マルクス理論は反証される。このような事情は、80年後の現時点でも変わるものではな

く、先進資本主義国よりも先に発展途上国で社会主義への移行が実現されたとすれば、マルクス理論は反証される。

これに対して、レーニン主義理論によれば、社会主義への移行は世界のどこの国においても起こりうる。「資本の戦線は帝国主義の鎖が他よりも弱いところで断ちきられる」という言明は、基本的に、革命は革命の起こりやすいところで起こる、という取るに足らないことを「予測」しているにすぎない。マルクス理論が発展途上国での社会主義建設を全て禁じるのに対し、この理論は一切禁じない。したがって、この理論は、マルクス理論に比べて反証可能性の度合いが著しく低いと言わざるをえない。この理論が反証されるのは、革命が全く起こらないか、あるいは社会主義建設に乗りだした国がそれに失敗して自ら社会主義を放棄するという出来事によってである。

そこで、「ロシアは社会主義建設を成功させた」という言明が正しければ、上記のレーニン主義理論は裏付けられたことになるが、マルクス理論は明らかに反証されたことになる。ポパーによると、ロシアにおける実験の「成功」はマルクス理論にとって致命的なものであった。

だが、ここで注意しなければならないのは、ポパーが自ら提唱した反証主義を果たしてこの問題に正しく適用していたのか否かという点である。ある理論の創始者がその理論の使用において誤りうることは、ポパー自身が主張したことである⁹⁹。

ポパーの反証主義が成立するためには、理論を反証するものとして提示された事実がいかなるものであるのか、これが重要な要素となる。その事実が、本当に当の理論を反駁しうる決定的な事実であるのか否か、このことこそがポパーの反証主義においては最も注意深く吟味されなければならない¹⁰⁰。

ポパーが『開かれた社会とその敵』においてマルクス理論への反証として提出した事実は、彼が「大胆なそしてしばしば成功した実験」と評価するものであり、それはネップの後の「諸実験——五ヶ年計画など」のことである。ポパーによれば、これらの諸実験の成功は、「社会主義はプロレタ

リアートの独裁プラス電氣化からなる」という観念が、上から社会を変革したことを意味しており、これによって生産手段の先行的発展を条件とするマルクスの社会革命についての理論が反証された、というのである。

ロシアにおける諸実験は、確かに、マルクスの著作に散見される共産主義社会の実現を目指した試みであった。だが、この試みは、マルクスが定式化した社会構成体移行の法則に抗して、それを実現しようとする実験であった。果たして、ロシアは、この実験によって新しい社会構成体の建設に成功し、マルクスの社会構成体移行の法則を反駁することにも成功したのだろうか。

この問いに対する解答は、明らかに否である。ポパーが提示している観察事実は、資本主義的生産様式に代わる新しい社会構成体の建設を目指す試みではあっても、その成功を示すものではない。独裁的政権が第一次および第二次五ヶ年計画によって上から工業化を達成した、という事実は、ソ連が独自の手法によって産業のより発展した国の生産水準へと近づくことに成功した、すなわち、発展途上国から先進国に向けて歩みはじめた、ということを示しているにすぎない。マルクスの史的唯物論が想定しているのは、アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的生産様式の次に位置づけられる新しいより高度な社会構成体である。この新社会構成体の実現については、物質的条件なしに、それを観念の力や命令によって拵え上げることはできない、とマルクス理論は言っているのであって、発展途上国の政府が、機械設備を外国から輸入して、工業化や「電氣化」を計画的に推進することが不可能である、と言っているのではないのである。このような工業化は、むしろ、産業の発展した国は遅れた国に対してその未来の姿を示す、というあのマルクスの定式が説明する範囲の内側に止まるものであって、新しいより高度な社会構成体の建設とは言えない。工業化と新社会構成体の建設とは二つの異なる概念である。ポパーはこの二つを混同していると言わざるをえない。ポパーが、『開かれた社会とその敵』で、マルクス理論に対する反証とみなした1930

年代における五ヶ年計画の成功は、工業化の成功ではあっても、新社会構成体の建設の成功ではない。当時、産業のより発展した国であった米国は、大不況に喘いでいたとはいえ、生産力水準の点でソ連のはるか先を歩んでいた。この生産力水準という一つの側面だけをとりても、当時のソ連の経済システムが資本主義よりも高度な生産様式を実現していたとは言えない。ポパーがマルクス理論に対する反証として提出した事実は、現実には、反証のために十分に確実な事実ではなかったのである。

だが、ポパーが『開かれた社会とその敵』を執筆していた当時には、ソ連は社会主義の実現にまでは到達していなかったとしても、その後の経済発展によって、ソ連が産業の最も発展した国に成りえていたとしたら、それはマルクス理論を反証する有力な事実となっていたであろうことは否定しえない。ポリシェビキ政権は、社会主義が高度な生産力を伴うべきことを強く意識していたので、自国における生産力の発展を常に追求してきた。とりわけ、1961年に採択されたソ連共産党綱領は、人口一人あたりの生産高で米国を上回ることを、具体的な年限を示して宣言した。もしこの目標が実現し、ソ連が米国を凌駕する最富裕国になっていたとしたら、それはマルクス理論を反証する有力な証拠となりえていたであろう。しかし、現実には逆の経過をたどり、ソ連は一度も米国を上回りえないまま自己崩壊するに至った。つまり、ロシアで始められた社会主義建設の実験は、新しいより高度な社会構成体の創出という点では、結局最後まで成功を見ないまま終了したのである。

よって、「しかるにロシアは社会主義建設を成功させた」という言明は、マルクスの史的唯物論を反証する言明としては、誤った命題であったと結論しうる。

さて、以上のように、先に掲げた推論のうち、その大前提は正しかったが、小前提は誤っていたとすれば、「よってマルクスの史的唯物論は反証された」という結論も誤っていることになる。つまり、マルクス理論は、ロシアにおける実験に

よっては反証されずに、科学的理論として生き残っていることになる。

だが、ここで、ソ連崩壊後の現時点から、あらためてマルクスの史的唯物論の真理性を再考してみると、ただちに提出されると思われるのは次のような批判である。すなわち、結局のところ先進資本主義国では革命は起こらなかったのだから、この事実によってマルクス理論は反証されたものとみなしうるのではないか、というのがそれである。かかる批判に対しては、まずなによりも、マルクス理論の次のような性格が指摘されるべきである。すなわち、この理論は社会革命の日時を予測するものではなく、そのメカニズムを予測する理論である、ということである。この理論にかかる性格は、同じ時期に発表されたダーウィンの進化論と対応させることによって、より明瞭になると思われる。すなわち、ダーウィン理論が予測するのは、自然淘汰のメカニズムによって来るべき進化が実現するであろう、ということであって、これこれの日時に進化が実現するであろう、ということではない。同じように、マルクス理論が予測するのも、生産力と生産関係の矛盾化のメカニズムによって来るべき社会革命が実現するであろう、ということであって、これこれの日時に社会革命が実現するであろう、ということではない。ポパーは、まさにこの革命のメカニズムを取り上げ、生産諸力の発展→新生産諸関係の出現という理論による予測がロシアでは逆になった、と主張したのであった。だが、この順序を逆転させようとする試みは失敗に終わった。

一方、レーニン主義の真理性の方はどうか。本稿の冒頭に引用した小河原氏の見解は、マルクス主義という言葉はレーニン主義と置き換えるならば、正しい判断であると言わなければならない。東欧とソ連における社会主義建設の放棄によってレーニン主義理論は反証されたのである。レーニン主義の出発点は、産業の発展した国は遅れた国に対してその未来の姿を示す、というマルクスの命題の否定にあった。レーニン主義の反証は、当然のことながら、この出発点の反証をも意味している。東独やチェコの失敗は、産業の

より発展した国が産業のより遅れた国で出来上がった経済システムを採用したことによる失敗、という一面を持っている。また、旧社会主義国および現社会主義国において進められている市場メカニズムの導入は、産業のより発展した国の経済システムを産業のより遅れた国が採用するという、マルクス理論的現象の一例であるといえよう。

ポパーの反証主義によれば、より良い理論とは、反証の機会がより多く、最善の努力にもかかわらず反証できなかった理論である。科学の進歩とは、より良い理論がより劣った理論を打ち倒して生き残ることである。マルクスの史的唯物論は、レーニン主義者によって硬直した教条であると非難され、繰り返しその反証実験を、文字通り命がけで、試みられてきた理論である。しかし、不幸にしてマルクスの史的唯物論は反証されなかった。グラムシの言葉とは反対に、史的唯物論の公式は、実際に考えられてきた以上に厳格なものであったのである。

おわりに

『経済学批判』と『資本論』の序文に定式化されているマルクスの史的唯物論は、マルクス主義者やマルクス経済学者によってさえも、必ずしも科学的理論であるとは見なされてこなかった。それは、膨大な史料を整理するための一つの指針にすぎぬとか、複雑な社会経済現象を研究するための一つの観点にすぎぬとか、あるいはまた、現実の経済分析には役立つ抽象的なドグマにすぎぬとか、そういった評価が少なくなかったように思われる。

しかし、ポパーが反証主義の立場から行った史的唯物論批判を、ソ連崩壊後の現時点で検証してみても判ることは、まず第一に、マルクスの史的唯物論が反証可能な理論すなわち科学的な理論であること、第二に、ソ連における真剣な努力にもかかわらず反証されなかったこと、第三に、反証されなかった以上科学的理論として容認されるべきであること、以上である。

注

- (1) Karl R. Popper, *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*, Routledge, London and New York, 1989, pp. 33-39 (藤本隆志/石垣壽郎/森博訳『推測と反駁』法政大学出版局, 1980年, 57-67頁), Karl Popper, *Unended Quest: An Intellectual Autobiography*, Routledge, London, 1992, pp. 31-38 (森博訳『果てしなき探求』上, 岩波書店, 1995年, 51-64頁), *Offene Gesellschaft - Offenes Universum: Franz Kreuzer im Gespräch mit Karl R. Popper*, Franz Deuticke, Wien, 1986, S. 24 (小河原誠訳『開かれた社会—開かれた宇宙』未来社, 1992年, 36頁)。
- (2) Karl R. Popper, *Logik der Forschung*, Julius Springer Verlag, Vienna, 1934.
- (3) Karl R. Popper, "The Poverty of Historicism I", *Economica*, 11, 1944, No. 42, pp. 86-103, "The Poverty of Historicism II", *Economica* 11, 1944, No. 43, pp.119-137, "The Poverty of Historicism III", *Economica*, 12, 1945, No.46, pp. 69-89.
- (4) Karl R. Popper, *The Open Society and Its Enemies, Volume I, The Spell of Plato, Volume II, The High Tide of Prophecy: Hegel, Marx, and The Aftermath*, George Routledge & Sons, Ltd., London, 1945.
- (5) 小河原誠「ソ連邦崩壊後における開かれた社会」社会思想史学会年報『社会思想史研究』第17号, 1993年。
- (6) ポパーは, *Unended Quest: An Intellectual Autobiography*, Routledge, 1992の中に, "Postscript to Marxism, 1992"と題した短文を書いているが, そこにはただソ連崩壊に対する喜びの表明が見られるだけである。
- (7) マルクス経済学の立場からポパーによるマルクス批判を検討したものに, 田中菊次『増補版「資本論」の論理』(新評論, 1978年)第四編II, 柴田信也「経済学体系の内と外」(研究年報『経済学』(東北大学)第55巻第4号)がある。これらの論考が主として『歴史主義の貧困』を対象とするものであるのに対して, 本稿が主に考察対象とするのは『開かれた社会とその敵』の史的唯物論批判である。
- (8) Karl R. Popper, *The Logic of Scientific Discovery*, Routledge, London and New York, 1980, Chapter I-VII (大内義一・森博訳『科学的発見の論理』恒星社厚生閣, 1971年, 第1章~第7章), Karl Popper, *The Poverty of Historicism*, Routledge, London and New York, 1986, Chapter IV (久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論社, 1961年, 第四章), Popper, *Conjectures and Refutations*, Chapter I Science (前掲『推測と反駁』第一章科学), から。
- (9) Popper, *Conjectures and Refutations*, p. 37 (前掲『推測と反駁』64頁)。
- (10) Karl Popper, *The Open Society and Its Enemies*, Golden Jubilee Edition, Routledge, London, p. 701 (前掲『開かれた社会とその敵』第二部, 329頁)。
- (11) Ibid. (同上)。
- (12) Ibid. (同上)。
- (13) Ibid., p. 339 (同上, 104-105頁)。
- (14) Ibid., p. 374 (同上, 136頁)。
- (15) Ibid., p. 394 (同上, 154頁)。
- (16) Ibid., p. 338 (同上, 104頁)。
- (17) *Offene Gesellschaft - Offenes Universum*, S. 12 (前掲『開かれた社会—開かれた宇宙』17-18頁)。
- (18) 『グラムシ選集5』山崎功監修, 合同出版, 1978年, 145-146頁。

- (19) Popper, *The Open Society and Its Enemies*, pp. 312-313 (前掲『開かれた社会とその敵』82頁)。
- (20) 社会構成体移行の問題に関して、『資本論』の序文を書いていた時期のマルクスと晩年のマルクスとは、その考え方に違いが見られるという見解がある。例えば淡路憲治氏は『マルクスの後進国革命像』(未来社, 1971年)において、『資本論』段階のマルクスと初期および晩年のマルクスとは、後進国革命について異なった考え方を持っていたと述べている。本稿が考察対象とするのは『資本論』段階のマルクスである。この段階の理論が正しいとすれば、他の段階の理論は誤りであるということになろう。また、史的唯物論という語に含まれる思想は多様でありうる(例えば、服部文男編集『史的唯物論と現代・第2巻』青木書店, 1977年)。本稿がマルクスの史的唯物論という語で指示するものは、本文で限定した範囲のものである。
- (21) Karl Kautsky, *Die Diktatur des Proletariats*, Verlag der Wiener Volksbuchhandlung Ignanz Brand & Co., Wien, 1918, S.43.
- (22) Karl Kautsky, "Is Soviet Russia a Socialist State?", *Social Democracy versus Communism*, Edited and translated by David Shub & Joseph Shaplen, Hyperion Press, Inc., 1979, p. 90.
- (23) Maurice Cornforth, *The Open Philosophy and The Open Society, a Reply to Dr. Karl Popper's Refutations of Marxism*, London, 1968, p. 22 (城塚登他訳『開かれた哲学と開かれた社会』紀伊國屋書店, 1972年, 21頁)。
- (24) 『スターリン全集第6巻』スターリン全集刊行会訳, 大月書店, 86頁。
- (25) 同上, 110-111頁。
- (26) *Marx Engels Werke Band 23*, Dietz Verlag Berlin, 1963, S. 12.
- (27) トロツキー『ロシア革命史』(三), 山西英一訳, 角川文庫, 513頁。
- (28) *Marx Engels Werke Band 23*, S. 27.
- (29) 前掲『スターリン全集第6巻』111-112頁。
- (30) 『スターリン全集第8巻』スターリン全集刊行会訳, 大月書店, 84-85頁。
- (31) 前掲『スターリン全集8巻』94頁。
- (32) 前掲『スターリン全集第6巻』387頁。
- (33) Popper, *Unended Quest*, p. 185 (前掲『果てしなき探求』下, 160頁)。
- (34) 関雅美『ポパーの科学論と社会論』勁草書房, 120頁, 参照。